

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

神竹喜重子

【所属】(助成決定時)

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

【研究題目】

19世紀末から20世紀初頭におけるロシア歌劇場の上演活動と音楽批評——ロシア性の追求を巡って

【研究の目的】(400字程度)

本研究では、ロシア音楽が20世紀初頭のモダニズムの隆盛の中、それまでの西洋音楽の影響下からいかに「ロシア音楽」としての自己を追求したのか、またそれに対し音楽批評がいかなる役割を果たしたのか、という問題に取り組んだ。これまで同時期のロシア音楽については、各作曲家の音楽作品の分析、伝記的評論など、様々な角度からの研究がなされてきたが、ロシア音楽の「自己覚醒」について、ロシアと西欧との関係性を含めた広い文化的コンテクストの中で明らかにしたものは少ない。本研究では、当時のロシアにおいて、古代ルーシ以来のロシアの民衆芸術を復興させた古儀式派商人階級による芸術メセナに注目し、彼らが経営していた私立歌劇場におけるオペラ上演の実態、及びそれらに対するメディアの報道・批評を中心に扱い、ロシア音楽の「ロシア性」が追求されていく過程を明らかにすることを目的とした。

【研究の内容・方法】(800字程度)

まずは、古儀式派商人階級の活動拠点であるモスクワに注目し、彼らが行っていた芸術メセナの実態を調査した。その結果、当初福祉活動を目的としていたのが、徐々に芸術メセナへと発展し、演劇界ではモロゾフやスタニスラフスキー、音楽界ではマーモントフ、ジミーン、美術界ではトレチャコフなど、様々な芸術分野において古儀式派のパトロン、芸術家が中核をなし、人・モノ(芸術作品)を介した異分野間の活発なネットワークが構築されていたことが明らかとなった。この過程において、マーモントフは帝室が西欧文化志向のもとで抑圧されていた本来のロシア文化を求め、アブラームツェヴォで民芸復興運動を起こした。そしてこれを基に、それまでは貴族階級しか恩恵を受けられなかったオペラ文化を、自らが創設した私立歌劇場において安価なチケット制度により大衆化させていった。彼はまた、聴覚型鑑賞を前提としていた従来の帝室劇場のオペラ上演に対し、視覚型鑑賞の視点を導入しながら舞台美術、衣装、演劇において改革を行い、総合芸術としての新しいオペラ上演の在り方を提示した。こうしたマーモントフの実験的経験が、後に演劇界のスタニスラフスキーによって「スタニスラフスキー・システム」として体系化されることとなった。

次に、ロシアの私立歌劇場の上演記録を収集し、取り扱われているレパートリーの傾向について帝室劇場との比較の中でデータ解析を行った。その結果、帝室劇場と明確に異なる点として、私立マーモントフ歌劇場においては、ツアーリズムに対する鋭い批判を投げかけた《プスコフの娘》、商人階級の台頭を暗示した《サトコ》などのリムスキー＝コルサコフのオペラや、古儀式派を主人公とした《ホヴァンチナ》などのムソルグスキーのオペラが、長期スパンで上演されていることが分かった。これらは、帝室劇場から「民衆の中に反帝政因子を生み出し兼ねない」という懸念により排除されていたレパートリーだった。マーモントフは、リムスキー＝コルサコフやムソルグスキーのオペラ作品を上演する為、既にこれを活発に上演していた地方都市の歌劇場から優秀な人材をヘッドハンティングし、上記のオペラ上演改革を行っていた。

最後に、ロシアの私立歌劇場に関するメディアの報道や批評を取り上げた。アレクサンドル三世の無政府主義運動の弾圧に始まり、ニコライ二世による革命勢力の弾圧のもとで文芸界での検閲が一層厳しくなる中、私立マーモントフ歌劇場が《サトコ》を上演したことが当時のロシア音楽界に大きなインパクトを与えた。その中で、上演内容自体が高く評価されたのみならず、「帝国の官僚に対するリベラル派による私的イニシ

アティヴの勝利」、「時代遅れの封建主義に対する資本主義の勝利のシンボル」など政治的観点による評価もなされていたことが明らかとなった。

【結論・考察】（４００字程度）

世紀狭間のロシア音楽界においてなされた「ロシア性」の追求は、単にそれまで影響を受けてきた西洋音楽からの自立を意味していたのではない。ピョートル大帝の西欧化改革以降に抑圧されてきたロシア文化の源泉への探求、帝政による文芸界への厳しい検閲、貴族層だけが特権的に文化の恩恵を受けることのできる文化制度の在り方への不満といった、音楽外の諸々の社会的要因と分かちがたく結びついていた。

マーモントフは、「富は社会のために還元されなければならない」という古儀式派の道徳的思想に基づき、オペラ上演を大衆化させたが、そこには単に大衆啓蒙という目的のみならず、帝室劇場の検閲に対抗するための一般聴衆層の拡大という戦略が存在していたと考えられる。帝室劇場から排除されていたリムスキー＝コルサコフやムソルグスキーのオペラを支持し、上演することで、帝政に対する鋭い批判眼を、識字率の低い聴衆層にも認識させようとしていた。

さらに、私立マーモントフ歌劇場とカザンなどのロシア地方の歌劇場が、リムスキー＝コルサコフやムソルグスキーのオペラ上演歴のうえで連動していること、マーモントフが地方から優秀な人材をヘッドハンティングしていることなどから、モスクワの私立歌劇場と地方の歌劇場の間で、リムスキー＝コルサコフやムソルグスキーのオペラ上演にあたり、人・モノの移動による協力関係が存在していたと思われる。

